会報

第204号

題字出口草露
発行者　〒679-5322佐用郡佐用町上石井685　安藤直彦方
兵庫県歌人クラブ
会計　〒676-0011高砂市荒井町小松原2-12-5　石原智秋
振替　01110-5-6903
印刷所　株式会社甲南堂

ふれあいの祭典 兵庫短歌祭

令和2年度
県民会館 けんみんホール

文部科学大臣賞
大谷　明美さん（加西市）

ジュニア部門兵庫県知事賞
関根　遙さん（神戸市立星陵台中学校）

和歌文化の現代的意義を熱く語る島内景二氏

令和2年11月21日午後12時30分からふれあいの祭典「兵庫短歌祭」が県民会館けんみんホールにて開催された。

今年は新型コロナウイルス感染予防のため、4月29日開催予定の神戸短歌祭は中止を余儀なくされた。そのため、開会に先立って令和元年度兵庫短歌賞・奨励賞・特別賞の表彰式が行われた。兵庫短歌賞受賞の藤本美智子氏が「自然体で存在感のある歌を詠めるようめざしたい」と挨拶。特別賞の奥田光子氏は9月20日逝去。先生のたなかみち氏が「女学校時代より80年間歌を詠んでこられた奥田さんの最晩年に光をあてていただいたことを感謝します」と故人に代りお礼を述べられた。

総合司会は矢野一代、西橋美保両氏。

中井弘慈兵庫県芸術文化協会業務執行理事が「今年は新型コロナウイルスの関係でふれあいの祭典の事業の約半分が中止になったので、兵庫短歌祭の開催をうれしく思う。今後も新型コロナウイルス感染対策の徹底を図りながら兵庫県の文化の振興のため短歌を続けてほしい」と挨拶。

続いて安藤直彦歌人クラブ代表が「新型コロナの感染者数が日毎に増える中で、活動か自粛か大いに迷うが、知恵を出しながらこの状況を乗り切っていきたい」と挨拶。

短歌祭応募作品は一般の部307首、ジュニアの部372首。一般の部入賞者は文部科学大臣賞大谷明美氏他10名、入選7名、佳作16名。ジュニアの部は兵庫県知事賞の関根遙さん他入賞者10名、入選7名、佳作39名が受賞。表彰状と副賞が授与された。

一般の部ではスライドに入賞歌を映し、司会者が読み上げた。ジュニアの部では、受賞者が自分の歌を読み披露。

講評は、一般の部は新屋修一氏、ジュニアの部は加藤直美氏が担当。両氏の的確な講評やアドバイスは受賞者に自信と喜びを与えた。

休憩の後、電気通信大学名誉教授島内景二氏による『和歌と異文化統合―五七五七七は、平和の韻律』の講演が始まる。

古今和歌集が打ち立てた和歌文化は、外来思想を受け入れ新しい「日本文化」を創り出し、調和と平和の母胎となった。その現代的な意義を考え直し、21世紀の短歌のあるべき姿を発見する一助としたいと熱く語られた。

桂保子副代表が「2020年は大変な時代となった。目に見えないウイルスに右往左往しているが、こんな時代だからこそ愚直に言葉を紡いでいきましょう」と閉会の挨拶。

新型コロナウイルスの勢いが収まらない中、消毒、マスクの徹底、換気、座席を開ける等の対策を十分にとりながら、無事に終了することができた。出席者60余名　（鈴木裕子）

兵庫短歌賞受賞の喜びを語る藤本美智子氏

一般の部の講評を的確にする新屋修一氏

講演
「和歌と異文化統合
―五七五七七は、平和の韻律」

（電気通信大学名誉教授）島内 景二

島内景二氏のプロフィール

一九五五年、長崎県佐世保市生まれ。東京大学文学部卒、東京大学大学院修了、現在は電気通信大学名誉教授。国文学者・歌人（玲瓏）・短歌評論家・歴史小説評論家。歌集に『夢の遺伝子』、著書に『大和魂の精神史』『和歌の黄昏 短歌の夜明け』など

近著「和歌の黄昏 短歌の夜明け」

本日の講演の趣旨は、「短歌」と呼ばれる以前の「和歌」、脈々と引き継がれてきた「和歌文化」が何であったのか、そして、現代の日本の平和にとって「和歌文化」がどんな新たな意義をもつのかといったことを問うものです。

●和歌と短歌は似て非なるもの

まず、私の「和歌」と「短歌」についての考え方を述べます。和歌と短歌は同じ五七五七七、三十一音の形式で詠まれていますが、その目指すところは全く別のものだと考えるからです。

和歌は「これが、よいのだ」という現実肯定の立場から、平和と調和を求める世界です。言いかえれば、美しい自然の秩序を尊び、万人が共有する生きる喜びの安定を願うものです。表現面では、共感を得ることが大切となり、いきおい類想的類型的になることは否めません。では短歌はどうか。短歌は「これでは、よくない」という現実否定の立場です。和歌の力では外圧に押しつぶされる、現実を変革・変容しなくてはという危機意識に基づく姿勢です。ここで重要となるのは、自分の考え・主張をもち、それを個性的に表現することです。例をあげてみます。

・ひさかたの光のどけき春の日にしづごころなく花の散るらむ　（紀　友則）

・聖母像ばかりならべてゐる美術館の出口につづく火薬庫　（塚本邦雄）

前者は万人が共感する「平和の和歌」、後者は苛烈な批評精神による「戦う短歌」と言えます。また、前者は朗詠にふさわしい韻律を擁しており、後者は意図的な「語割れ・句またがり」などにより朗詠できません。

大胆な二者択一の考え方を披瀝しましたが、私の和歌、和歌文化についての立論は、和歌と短歌の違いへの問題意識から始まったのです。

●古今伝授で顕在化した「和の思想」

日本文化の故郷、本流をどこに見出すかという問いに対して。私たちは常識として古事記とか万葉集の世界を想定します。しかしながら、永く日本人の心に影響を与え続けたものは、古事記や万葉集ではありませんでした。実際、これらの書物は中世まで読まれず、その存在も殆ど知られていなかった。これらが脚光を浴びたのは江戸時代の末期、契沖や賀茂真淵などの国学者が現れてからのことです。つまり、中世までは「古代」を必要とせずに日本文化が形成されたのです。

それでは「千年の日本文化」の源流はなにか。それは「古今和歌集」「伊勢物語」「源氏物語」の三点セットの世界です。古今和歌集は和歌そのもの、伊勢物語は歌物語、源氏物語には八百首に及ぶ和歌が散りばめられています。和歌は平和の韻律、この思想・文化が近世まで多くの先人たちの手によって継承されました。「千年の日本文化」と言ったのは古今和歌集の成立以後のことを示すためです。

ところで、和歌の「和」は、元来、漢詩に対する日本（和）の詩を意味しています。しかし、和歌の「和」は、それだけにとどまらず、調和・和解・融和、総じて「平和」への理念を体現する思潮として進展・深化していきます。これを推し進めたのが「古今伝授」という文化継承システムでした。古今和歌集の読み解き方を「秘伝」として後世に相伝する伝統です。

また、十五世紀の応仁の乱から十七世紀の大坂夏の陣までの戦乱の時代に、伊勢物語は貴種流離譚として、源氏物語は雅な恋愛小説・風俗小説として読まれるだけでなく、平和と調和をもたらす「理想の教訓・政道の書」として読まれました。例えば源氏物語の「雨夜の品定め」はただの女性論ではなく、人材活用論、人間関係論としての教訓として深く評価されます。こうした「政道読み」「教訓読み」「平和読み」と呼ばれる読みは、乱れた世の中を立て直し、万民が心安らかに暮らせる世の中を模索する「政（まつりごと）」に携わる為政者にとって、重要な示唆を得るものでした。元々の作者、紫式部にとっては。意図せぬ深読みだったと言えますが、ともあれ、理想の男女関係・理想の家族関係、理想の治世の在り方がここに描かれていると信じられていたのです。このようにして和歌は「和歌文化」すなわち「源氏文化」として「和」の日本文化を形成したわけです。

なお、源氏物語は当初から多くの研究者による注釈がなされてきましたが、それらを集大成したのが十七世紀後半、元禄文化の直前に編まれた北村季吟の「湖月抄」でした。この書物は一つの読み方だけでなく、どのように読まれてきたかを詳しく照射するものでした。ちなみに北村季吟は松永貞徳の弟子、北村季吟の弟子は松尾芭蕉です。この書物を著した後、季吟は将軍徳川綱吉の代に幕府歌学方に招聘されます。これは和歌文化・源氏文化が江戸に移植され根付く画期的な出来事でした。

●和歌文化の本質は異文化統合

次に、「和歌文化」というものの本質、どのような構造で成り立っているのかについてお話します。結論から言いますと、和歌文化は「和・漢・梵（天竺）」の異文化が絶妙の調和によって統合されたものです。「和」とは元来の日本文化（和歌・神道）、「漢」は中国文化（儒教・道教・漢詩文）、そして「梵」はインド文化（仏教、とくに禅）を指します。つまり、日本文化の土台の上に中国文化、さらにその上にインド文化を積み重ねて立体化している、言わば三階建て構造として「和」の日本文化が成立していると考えます。私はこの構造を「異文化統合システム」と呼んでいます。そこに貫く「和の思想」を明確に打ち出したのが、紀貫之が記した古今和歌集の仮名序です。一部抜粋します。【力も入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは、歌なり】。

新しい様々な異文化を受け入れ、上へと積み重ね、しかも根幹にある自身を見失わずに統一感のある立体化した文化秩序を作り上げる、これが「和の思想」の神髄であります。

いま少し補足しますと、与謝野晶子の歌には仏教用語が頻出していますが、違和感がありません。また、定家が発明した「本歌取り」の手法もまた立体化の意匠によるものです。これは類想の作歌ではなく、先人の到達した情緒の世界を下敷きにしつつ、さらに新しい雅の世界を創出する「重ね合せ」だとみなせます。私の歌の師匠である塚本邦雄は、日本の古典だけでなく、旧約聖書や西洋の象徴詩の世界をも取り入れていますが、これも本歌取りの意匠の一つと考えられます。

●揺らぐ「和歌文化」への信頼

ところが、江戸時代中期から、この「和の思想」「和歌文化」への信頼が揺らぎ始めます。

定家に始まる古今和歌集や伊勢物語・源氏物語等の古典研究は「和学」と呼ばれ、古典研究の域を越えて平和と調和を探究する学問でもありました。そうした「和学」を根底から突き崩そうとする人たちが現れます。契沖や賀茂真淵です。彼等は本来の日本、その文化や大和言葉がどんなものであったのかを探究します。そこで仏教渡来以前、儒教・道教渡来以前、西洋文化流入以前の「日本」を発見し、古代文化への回帰を図ろうとしたのです。具体的には古事記や万葉集の研究であり、これは「国学」と呼ばれました。この国学者たちの探究の背景にあったのは、「和歌文化」「和の思想」では圧倒的な西欧文化の襲来に対応できない、異文化を統合する積み重ねどころか、その土台そのものが崩される、日本を守らなければといった危機意識でした。「神仏習合」や「和洋折衷」が否定されたのもこの故です。

この考え方は近代短歌の理論的指導者であった正岡子規に引き継がれます。ご存じのように、子規は「歌よみに与ふる書」において、「貫之は下手な歌よみにて『古今集』はくだらぬ集に有之候」と断定し、古今和歌集の仮名序の「対立を和らげる和の理念」も否定したのです。そんな子規が絶賛したのは、源実朝（将軍）や田安宗武（将軍吉宗の子）、戦うもののふ（武士）です。つまり、戦う歌の作者です。子規が提唱したのは和歌の「たおやめぶり」ではなく、万葉集における「ますらおぶり」という強い表現でした。そのために漢語や俗語に加えて洋語も受容しています。そうした歌はもはや和歌ではなく、「短歌」です。和歌から短歌へという変革・革新です。

こうして和歌文化は「旧派」というレッテルを貼られることになります。旧派とは「時代に合わないもの」という意味に他なりません。ちなみに、子規に繋がる「アララギ」の巨匠たちは、例外なく万葉集に没頭しています。

●源氏物語の主題を読み改めた宣長

話が前後しますが、賀茂真淵を師と仰ぐ本居宣長は、源氏物語に新たな主題を発見し、古今伝授の「湖月抄」に胚胎する「和の思想」そのものを否定してしまいます。宣長は源氏物語に天才的独創的な読解を行い、名著「玉の小櫛」で「もののあはれ」という源氏物語の新しい主題を提起しました。前述のように、平和と調和の教訓書として読まれた源氏物語は、和歌文化・源氏文化の基本となる「和の思想」の根幹となるものでした。ところが、宣長はその根拠をことごとくひっくり返したのです。光源氏と藤壺の密通や柏木と女三の不義を肯定し、そんな道徳的な秩序を破壊する行為にむしろ感動し援護したのです。宣長にとっての「もののあはれ」は、そこはかとない哀感といったものでなく、荒魂（あらぶる魂）の怒りの爆発、その破壊衝動を容認するものでした。

宣長は仏教や儒教の説く思想を「漢心（からごころ）」として排斥し、古事記・万葉集の「大和心（やまとごころ）」を強く打ち出します。異文化統合ではなく、古代文化一本槍で日本文化の活路を見出そうとしたわけです。こうして和歌は「平和と調和をもたらす歌」から単なる「日本の歌」に戻ります。これは徳川三百年の平和の文化的バックボーンであった「和の思想」を土台から崩すものでした。江戸幕府の瓦解、明治維新は宣長たちの国学によってもたらされたと言えなくもないのです。

もちろん、源氏物語の研究をライフワークに定めた私にとって、宣長の「道徳論や政道論の否定」には異論があります。教訓読みはつまらないとは思えないからです。「平和・生きる喜びを維持するための歌」の復権を目指して、さらに研究を進めるつもりです。

●近代短歌・前衛短歌は「戦う短歌」

最後に、時間の都合で要約になりますが、近代短歌・現代短歌について思うところをお話します。

前述の通り、近代短歌を牽引したのは正岡子規です。子規は和歌文化の裏返しとして、宣長から始まった「戦いの文化」を

「写生」という新しい意匠によって引き継ぎました。それをさらに深化したのが茂吉の「実相観入」です。子規の時代・近代を生きる者にとって、万葉集はかけがえのないものでした。また、塚本邦雄の前衛短歌も戦う短歌です。平和ではなく戦争をもたらした「日本の近代」への痛烈な抗議・否定の世界であり、近代短歌の別名である「アララギ」との戦いでした。

●21世紀の現代短歌に望まれること

源氏物語の研究者の私が今考えていることは、古今伝授の「和の思想」と宣長の「もののあはれ」を融和できないか、「もののあはれ」を「和の文化」に取り込むことで「和」の文化的理念をバージョンアップ（更新）できないかということです。その手がかりの一つが、後年「湖月抄」に「玉の小櫛」の論考を補注した「増注湖月抄」です。これによって否定された「和」の新たな意味が見えてくるはずです。また、乙川優三郎の世界史小説「R・S・ヴィラセニョール」は、「和の理念」と「もののあはれ」を積み重ねるのではなく、「表と裏」の関係で立体化しています。ちなみに、尾形光琳の「風神雷神図屏風」の裏に酒井泡一の「夏秋草図屏風」が貼られていたそうです。ここに破壊と調和の一体化を見ることができます。

つまり、「和歌」と「短歌」が表と裏の関係で貼りついた「五七五七七」の詩が現代日本と現代世界で望まれているのではと思います。そういう現代短歌が現れることを切に期待しています。

※講演後、尾崎まゆみ氏と安藤直彦氏の質疑応答が行われた。

（記録・藤本朋世）

短歌との出会い

大鐘 稔彦（筆名 髙山 路爛）

プロフィール

1943年愛知県生まれ。医師、作家。京都大学医学部卒。早くより癌の告知問題に取り組み「癌患者のゆりかごから墓場まで」をモットーにホスピスを備えた病院を創設。手術の公開など先駆的医療を行う。九九年にメスを置くまで「エホバの証人」への無輸血手術をはじめ手がけた手術は約六千件。

医学学術書の他、小説、エッセーを手がけ、代表作は累計174万部に及び、2010年映画化、2019年テレビドラマ化された「孤高のメス」。短歌歴は25年で『短歌人』同人。兵庫県歌人クラブ会員。南あわじ市在住。

私が初めて短歌に触れたのは小学六年の頃である。

近隣に父の妹である叔母一家が住んでいて、毎年正月になると叔母は女学校時代親しかった仲間を自宅に招いてカルタ取りを楽しんでいた。私と父も招かれ、一つ違いの従兄妹達も加わって二手に分かれての源平合戦である。

私はこれに夢中になった。

歌の意味はよく分からないものも数多くあったが、叔母や彼女のクラスメートの披講の巧みさの所為か、五七五七七の韻律が耳に快く響いた。

ずっと後になって知ったことだが、叔母は春日真木子が主宰する名古屋の短歌結社「水甕」の同人で、いっとき中日新聞歌壇の選者も務めたようだ。

楽しみなこの恒例行事は残念ながら三年ほどで終わりとなり、短歌から暫く遠ざかることになった。長いブランクを経て短歌に日常茶飯触れるようになったのは、埼玉県上尾市に有志と共に五階最上階にホスピス病棟を備えた病院を設立した頃からである。

そのホスピス病棟の一室にマイクを備え、牧師や僧侶に講話をしてもらった。歩けない患者は病室で、歩ける患者はその部屋に来て直に講師と対面しながら傾聴できるようにした。私は信仰の話はできない代わりに「平家物語」の朗読をさせてもらった。

いつだったか、愛妻家で妻の後追い自殺をして世間を驚かせた文芸評論家の江藤淳氏がNHKの「視点・論点」という番組で、「文庫本から『平家物語』が消えた。学生に文庫本の十倍、二十倍はするハードカバーの岩波書店か明治書院刊行のものを買わせるわけにはいかない。一体、日本の自称出版文化人は何を考えているのか！」と悲憤慷慨しておられた。

至極同然の至りで、「平家物語」を高校の教科書で知り「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」の出だしの文句からして、百人一首で知った短歌の七五調のリズムに魅せられ、爾来この古典は至高の愛読書となっていたからだ。

『平家物語』は戦記文学の傑作とされるが、随所に短歌が差し挟まれ、当時の武将達の文武両道に秀でた粋な姿を髣髴とさせる。中でも〝芸苑の美談〟として後世に長く語り伝えられたという平忠度の逸事は感動的で、私が本格的に短歌を詠みたいと思った一因ともなったのである。

・その昔奈落の底に在りし時我は出会ひぬ天野篤と

・細き糸操りていまだ震へざるこの手をいとしむ元外科医ぞ吾は

・同期生百余名中二十名古稀を迎へず泉下に眠る

・ピリオドを打たむと思はばいつでも可定年延長三度目なれば

・寝た切りの妻の笑顔が生き甲斐とバスを乗り継ぎ老人は行く

・食欲は無けれど妻に供ふため飯を炊くよと老患者言ふ

・ヒトラーのフセインやカダフィと似て非なるは選挙に勝ちてのし上がりしこと

・多感なる青春の日の危ふきをわれは救はるルソーの〝懺悔〟に

・家族とは何ぞやと自問自答する中学生の作文に涙す

・老いらくの恋にも似たる執念のたぎる一事を我は秘めたり

結社(グループ)	会　場	内　容	問い合わせ先
「白圭」龍野歌会	たつの市生きがいセンター	第4月曜、午前10時	0791(63)4734　内海　永子
揖西短歌会	揖西公民館(たつの市)	第4土曜、午前10時	0791(66)2186　菅野　仁孜
佐用姫短歌会	さよう文化情報センター	第2火曜、午後1時半	0790(82)3019　衣笠　邦惠
赤穂短歌の会	赤穂市民会館	第4土曜、午後1時半	0791(48)0137　尼子　勝義
銀の道短歌会	生野マインホール(朝来市)	第4金曜、午後1時半	079(672)2334　中島眞喜子
さくら木短歌会	枚田岡会館(朝来市)	第3日曜、午後1時半	
文学圏社	姫路花の北市民広場(姫路市)	月初めの午後	078(961)5676　浮田　伸子
コスモス姫路	姫路市民会館	第4日曜、午後1時	079(269)0513　飯田　進
コスモス藍の会	姫路市民会館	第2土曜、午後1時	079(448)0895　久米川孝子
ポトナム姫路	姫路市民会館	第3月曜	079(266)3603　羅川　範子
姫路水甕歌会	姫路市民会館　指導　小畑 庸子	第3土曜、午後1時	079(232)4003　生田よしえ
香寺短歌会	姫路市香寺公民館	第2水曜、午後1時	
塔姫路歌会	城南公民館(姫路市)	第2日曜、午後1時	079(322)1878　斉藤　わこ
小野短歌会	コミュニティセンターおの(小野市)	第1日曜、午後	090(3895)5022　芝本　政宣
下東条短歌教室	コミュニティセンター下東条(小野市)	第4日曜、午後	0794(67)0824　山本　満代
東条短歌会	東条公民館(加東市)	第2日曜、午後	0795(47)0451　森本喜美子
美加志保巨勢教室	巨勢教室(加東市東古瀬)	第3日曜、午後	0794(95)1817　味村　千秋
コスモス加西	中央公民館(加西市)	第2木曜、午後1時	0790(42)0415　藤岡　成子
	アスティア(加西市)	第2金曜、午後1時	
白珠加東支社	滝野公民館(加東市)	第2水曜、午前	0795(48)3679　片山　洋子
コスモス葛の花	八千代プラザ(多可町八千代区)	第2水曜、午後1時	0795(37)0680　岸本しげ子
てのひら	NPO法人てのひら(高砂市)	第1土曜、午後	079(442)2476　石原　智秋
東加古川短歌会	加古川総合文化センター(加古川市)	第2金曜、午後1時	079(423)5168　新屋　修一
茅花短歌会	ふれあい交流館(稲美町)	第2水曜、午前9時半	079(492)1766　前田　昭子
宝塚白珠の会	宝塚東公民館(宝塚市)	第3火曜、午後1時	072(794)0614　星野　敏江
心の花兵庫歌会	アステ川西6Fルーム1(川西市)	奇数月第1土曜、午後2時	072(794)3083　足立　晶子
芦屋水甕短歌会	芦屋市民会館	第2土曜、午後1時半	0798(43)6820　加藤　直美
	神戸市勤労会館	第4日曜、午前10時	
東浦短歌会	東浦老人福祉センター(淡路市)	第2木曜、午後1時半	0799(74)2141　片山 田佳子
千鳥短歌会	松帆活性化センター(南あわじ市)	第1土曜、午後1時半	0799(42)2062　山田　恵子

ふれあいの祭典 兵庫短歌祭 入賞作品評

文部科学大臣賞

大谷　明美（加西市）

・老い二人野良着のままにて将棋さす
農機具小屋の春の日だまり

のどかで懐かしい田園の原風景のような場が立ち上がり、古くて新しい味わいがある。「農機具小屋」が効いているからだろう。選歌に大半の票が集中したのは、どこか慌ただしい、心の落ち着きどころの薄い今日の社会状況からの共感が働いているのであろう。郷愁を伴うのである。勿論、内容からの共鳴を呼ぶのみならず、力みのない言葉の構成、語の調べのよさがそれをもたらしているのである。

こうした農耕社会の共同性といったもの、これからどうなるのであろう。IT化、グローバル化著しい今日、日本の原風景的なものが多くは消えてゆく、失われていく。それに代わる絆のようなものの乏しいままに。そうしたところにも「在るべき短歌」が志向される。

（安藤直彦）

兵庫県知事賞

婦木　和香（明石市）

・幼き日象さんが好きと言いし娘は
キリンのような彼氏連れ来る

動物園の人気者にも流行があるようだ。今は差詰めコアラやパンダであろうか。幼き日の娘さんは象が大好き。当時童謡まで生まれている。適齢期を迎えた娘さんが「キリンのような彼氏」を連れて来た。スマートで背は高く澄んだ目をした爽やかな青年である。彼氏の具体は一切不要。『キリン』で全てを表出。又、象との対比も面白く作者は勿論、夫君も好感を持たれたことであろう。読者にも素敵な彼氏が視えてくる。

（三津野幸代）

左から婦木和香、大谷明美の各氏

兵庫県議会議長賞

前田　陽子（洲本市）

・ゆるやかに緞帳あがりゆくやうな
夜明けの稜線　今日がはじまる

一日の初めに自然の雄大な「夜明け」を眺めて元気をもらわれた。舞台を観られたこともあるのだろう。比喩として先蹤はあるが結句と呼応して豊かな情景が好もしい。洲本の方なので海のつながる景色も雄大であろう。国生みの淡路島、山々も緩やかにつづき美味しいものもたくさんある。伊弉諾神宮に守られ情感あふれる人々の営みがある。震災後の淡路で県の短歌祭がひらかれたが、大勢の参加者があり、淡路の方々にお世話になった。

（浮田伸子）

兵庫県教育委員会賞

渡辺　啓子（神戸市）

・「戦争は終ったらしい」戻りゆく
母の時間に私はいない

一、二句に終戦の日の玉音放送を思う。不明瞭な内容と雑音の中に「終ったらしい」と国民は覚った。戦後七十余年、認知症となられた母上にその時の記憶が蘇るのか。単なる記憶でなく「戻りゆく母の時間」とした表現が一首に奥行を与えた。消えることのない母上の心の傷跡に寄り添えぬばかりか、その心に存在すらしないという現実。「私はいない」と言い切った作者の思いは如何ばかりであろうか。重い課題を含んだ一首の余韻は深い。

（生田よしえ）

（公財）兵庫県芸術文化協会賞

遠藤　和子（神戸市）

・老犬に寄り添い今日も行く人の
一歩一歩を夕日が包む

戦後七十五年、焦土と化した中から立ち上がり、経済が豊かになり、核家族化が進む現在、動物と共生なさっている家庭が多くなりました。

老犬に寄り添い散歩なさっている人を見て、頼もしく幸せに感じられたのでしょう。高齢者が多くなってゆく現代社会をうまく捉えられていて実感のある短歌です。いつ迄もお元気でいて下さいとの祈りも感じられます。下句の「一歩一歩を夕日が包む」が情景を良く表している。

（前田昭子）

神戸新聞社賞

吉永　明代（姫路市）

・〈こがねむし〉二番を唄いきる前に
母の短髪洗い終えたり

かっては長い黒髪がご自慢だった（？）母上、今はすっかり短くなられた髪にちらほら白いものが混じりそれなりにいぶし銀の老いの美しさを見せておられる。洗髪も手間どらなくなった。丁度童謡「こがねむし」の二番を唄い切らぬうちにそれは「ハイ、終りましたよ」と。なつかしいわらべうたを洗髪のバロメーターにされたセンスが光る。少しさびしいけれどすこやかな母上の「ありがとう」の微笑みが目に見える様だ。敬老の日に捧げる母の歌。

（保田ひで）

兵庫短歌祭実行委員会賞

池本登代子（神戸市）

・かたち見せ老いてゆくらし手の染み
をかくさず朝の吊革にぎる

何もなかった手にいつの間にか染みができている。まぎれもない老いのかたちだと自覚する作者。気持ちより先に身体に忍び寄る老いはともすれば嘆

きの歌になり易いものです。しかし、作者は違います。その染みをかくすことなく吊革に手をのばしています。

あるがままを受け入れる心の広さやプラス思考の毅然とした生き方に感銘しました。染みは或いは長寿の勲章でしょうか、高齢時代の過ごし方を考えさせられた一首です。（田岡弘子）

兵庫県歌人クラブ賞

山田　恵子（南あわじ市）

・デスクマットに孫の写真を挟むような人だったんだ　ふふ　ほっとする

現代に生きる人々の日常や機微を丁寧に描くことに定評があり、このたび第一歌集も出版した作者。事情は全く不明だがとりあえず「デスクマットに孫の写真を挟むような人」ではないらしい人物をめぐる一首。「ふふ　ほっとする」と笑うだけでこれも詳しい説明が全くない結句が面白い。軽い文体の余白に心の動きがさらりと見えて興味深いが、とびきりの笑顔とおぼしき問題の「孫の写真」を想像して読者も笑顔になってしまう。（西橋美保）

兵庫県歌人クラブ賞

西川　明美（養父市）

・狭くても「元気ですよ」とまたも蹴り時を待ちいる羊水に児は

胎児の成長を体感として感じることのできる母親でなければ表現できない歌である。羊水は、「命の揺りかご」「母の中にある小さな海」とも呼ばれる。三好達治の「郷愁」という詩の一節を想起した。

―海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がゐる。そして母よ、佛蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある。

倒置法を用いた結句の表現が一首を成立させた。（尼子勝義）

左から受賞者の中村かずえ、渡辺啓子、吉田友里子、遠藤和子各氏と短歌教室講師の桂 保子氏

兵庫県歌人クラブ賞

中村　かずえ（伊丹市）

・（人生にもう飽きました）もの言わぬ胃瘻の母の大きな欠伸

このお母さんはかなりの高齢で、もう長く胃瘻をされ、たぶん寝たきりの状態でおられるのかと思う。

口から食事をとることもできず、ただ静かに横たわっている母の大きな欠伸を見てその気持を代弁されたようだ。（人生にもう飽きました）とても悲しい言葉だが（大きな欠伸）の持つ穏やかな雰囲気に救われる。

見守る作者はどんな気持だろうか。書かれていない分、よけいに考えさせられた。（吉田千代美）

入選（7人）

青田　綾子（神崎郡）

・図書館は青い水底少年が原書繰りおり新樹の光

石原　智秋（高砂市）

・ドクダミの真白き花が十字切るどんより曇るコロナ禍の梅雨

三村　幸子（姫路市）

・あいつまだ廊下の奥に立ってるか七十五回目の終戦忌

鶴亀佐知子（赤穂市）

・戦争はあかんと書かれいし団扇終の日までも母は使いぬ

末澤千世子（加古郡）

・満月も大手をふってわたりゃんせ松の手入れのすみしわが庭

新家イサ子（佐用郡）

・ひとりなる寂しさはつか身にまとい金魚とわれとこの家に住む

西村　久代（姫路市）

・山ぎわの街を照らして輝かす沈んだはずの夕日の尻尾

佳作（16人）

芝本政宣（小野市）、糸田冨美代（尼崎市）、藤原さよ子（養父市）、岡本光代（宍粟市）、杉村百合子（神戸市）、羅川範子（姫路市）、藤本則子（姫路市）常次かずの（姫路市）、山村幸子（たつの市）、吉田友里子（大阪府）、井上　敏（丹波市）、中野由香（姫路市）、西久保光子（洲本市）、岸本　瞳（宝塚市）、山本みさよ（神戸市）、衣笠邦惠（佐用郡）

結社(グループ)	会　場	内　容	問い合わせ先
明石短歌会	明石公園会議室	第1金曜、第3火曜	078(912)2673　田岡　弘子
水甕明石支社	コープ朝霧店会議室	第1土曜、午後2時	078(914)0787　大迫　孝子
ひだまり歌会	大阪市立総合学習センター	第2火曜、午後1時	0797(84)8881　桂　保子
短歌を楽しむ	コープカルチャー西神南	第1土曜、午後1時	
青山短歌グループ	立花公民館(尼崎市)	第2木曜、午後1時	06(6429)5158　たなかみち
波濤神戸	保田ひで宅(長田区)	毎月中旬	078(612)9294　保田　ひで

ジュニア部門入賞入選作品選評

加藤 直美

本年度のジュニア部門参加校は中学校十五校、高等学校八校、支援学校一校、応募総数は三百七十一首でした。新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり例年より応募数は減りましたが、学校生活、クラブ活動、家族や友人への思いや恋の歌など瑞々しい感性の溢れた短歌に出会えました。またコロナ禍を題材にした作品も多く、今年ならではの心の揺らぎや思いが伝わってきました。今回の出詠を機に一人でも多くの中高生の皆さんが短歌に興味をもっていただければ幸いです。このたびの応募に際しご指導いただきました先生方に感謝申し上げます。

兵庫県知事賞

神戸市立星陵台中学校
三年　**関根　遙**

・母が煮る麦茶の香り広がると明日へと心が準備始める

麦茶を煮出すいい香りが伝わってくるようで情景が鮮明に立ち上がる。明日の朝、水筒にこの麦茶を持って登校するのだろう。「明日へと心が準備始める」のきっかけが、どこにでもある一般的な飲み物である麦茶の香りだという発想がユニークで非凡だ。また母親への感謝の気持ちも感じられ、中学生ならではの清々しい作品である。特別ではない日常生活のひとこまを切り取ることで、生き生きとした温かい一首になった。私たちはコロナ禍の中自粛生活を経験し、当たり前の日常がいかにかけがえのないものであるかを認識したはずだ。そんなことをも思わせる一首である。

兵庫県知事賞受賞の関根 遙さん

兵庫県議会議長賞

小林聖心女子学院中学校
一年　**森　葵**

・祖母からの優しさつめた小包を田舎の匂い探して開ける

新型コロナウイルスの影響のため田舎の祖母に会うことが叶わなかった作者かもしれない。小包には何が入っていたのだろう。それをあえて言わないことで「優しさ」「田舎の匂い」といった心情が引き立った。作者にとっては送られてきた物よりも、送ってくれた祖母の気持ち「優しさ」が嬉しかったのだと読み取れる。祖母を思いやる気持ちやノスタルジアが巧く表現された作品である。

兵庫県教育委員会賞

神戸市立六甲アイランド高等学校
二年　**片山　紅緒**

・「何をした」「された」わけではないけれど徐々に離れる友との間

喧嘩をしたわけでも、意地悪をされたわけでもないけれど、友との距離が徐々に離れていくという。作者はその状況を冷静に客観的に見ている。「悲しい」とか「寂しい」とか「嬉しい」などと感情を言わないことで作者の気持ちは読者にゆだねられ、作品はより豊かに読まれるだろう。このような人間関係は誰もが経験したことがあるだろうし、共感できるのだが、言葉で表現するのはとても難しい。短歌という三十一音の短い詩型で見事に詠った秀作。

（公財）兵庫県芸術文化協会賞

姫路市立香寺中学校
一年　**井上　結**

・空でなく池にうつった花火見る見下ろす空は私だけのもの

作者は皆が空の花火を見上げている中、ひとり池に映った花火を見下している。水面に映り揺らめく花火に、空に上がった花火とは一味違う美しさを発見したのだ。「池」は作者の心の「池」のようでもあり、それを「私だけのもの」と思える感性が素晴らしい。花火の鮮やかな色彩や音、火薬の匂いなども想像でき、作者の素直な喜びを感じ取ることができる。

神戸新聞社賞

神戸市立上野中学校
一年　**金沢　慶智**

・物語夢中で読んで一休み輝く海のしおりはさんで

「輝く海のしおり」がこの歌を引き立たせた。それは実際の栞でもあり、作者の心象のようにも読める。目を閉じれば夢中で読んでいた物語の世界が広がる。現実と物語の空想の世界が融合されたかのように感じるファンタスティックな作品である。

兵庫短歌祭実行委員会賞

姫路市立香寺中学校
三年　**高倉　涼雅**

・咲いた花いずれは枯れてしまうからずっと蕾でいちゃだめですか

蕾は大人になる手前の作者を表しているのだろう。「枯れる」には必ずやおとずれる大人という未知の世界への不安が感じられる。蕾のままでいたいという思いを「だめですか」と口語の疑問の形で表現したことで、若々しさや新鮮さの際立つ作品になった。

兵庫県歌人クラブ賞

神戸市立星陵台中学校
三年　**尾寺　亜美**

・あと一点これで決めるとつぶやいた振り抜く腕に祈りをこめて

部活動での試合の場面だろうか、健

康的で躍動感にあふれた作品。テニス？バドミントン？バレーボールのアタックかもしれない。勝負の一点を決めてやる！という意気込みが感じられる。「祈りをこめて」からは全力を尽くす作者の懸命さが伝わってくる。

神戸第一高等学校
一年　**今村　花菜**

・偶然の出会いをいつか必然と思えるような仲間になりたい

人生は偶然の積み重ねだ。特に学生時代の友人との出会いはたまたま偶然でも、親友に発展することも多々ある。まさに必然と言えよう。「偶然」と「必然」という言葉を巧みに使ったところが印象的。

南あわじ市立三原中学校
二年　**細川ひより**

・君が初めて私の名前を呼んだのは空に虹がかかってる時

君が初めて私の名前を呼んでくれた！まるで虹の魔法のよう。名前を呼ばれたドキドキ感が伝わってくる。中学生ならではの淡い恋の気持ちが上手く表現された。

兵庫県立伊丹高等学校
二年　**竹内　琴子**

・いつもより高く結んだ後ろ髪波にたゆたう海月のようで

髪型を少し変えただけでも気持ちは変わるもの。作者は何かしらの意思をもって、髪を高く結んだのだろう。「海月」という幻想的な生き物から相聞的なニュアンスをも感じる一首。

入選

神戸第一高等学校　**川脇　優菜**
・「あなたはそのままでいいよ」と母が言う自信つくその一言で

高砂市立竜山中学校　**濱中香乃恵**
・ボールペン何度も書いた君の名はこの手が覚え誰にも見えず

兵庫県立篠山産業高等学校**高杉　大樹**
・3密にならないためにひきこもりスマートフォンと濃厚接触

兵庫県立有馬高等学校定時制課程　**猶木龍之介**
・繰り返す痛みを抱え悩んでも空は青いし月は真白し

神戸市立上野中学校　**藤川　ゆら**
・「もういける」「まだすっぱいよ」とさわがれる庭のトマトは赤く日焼けし

播磨町立播磨南中学校　**小原　呼梅**
・から揚げだ　うちの夕食？いやちがう　風が教える隣家の献立

小林聖心女子学院中学校　**松本　美咲**
・この店であなたのメールを受けたから私にとっては思い出の場所

佳作

姫路市立香寺中学校　**狩野　陽遼**
姫路市立香寺中学校　**湊　椛恋**
須磨学園中学校　**山森　千種**
須磨学園中学校　**岡田　実桜**
須磨学園中学校　**矢成　杏**
須磨学園中学校　**小嶋　悠月**
小林聖心女子学院中学校　**鈴木　愛海**
小林聖心女子学院中学校　**尾濱　花凛**
神戸第一高等学校　**山口　航輝**
神戸第一高等学校　**油谷　翔**
神戸第一高等学校　**橋本　美優**
神戸市立神港橘高等学校　**児島唯桜里**
神戸市立神港橘高等学校　**須崎　楓奈**
神戸市立神港橘高等学校　**山本　唯愛**
高砂市立竜山中学校　**木下　萌香**
高砂市立竜山中学校　**藤本　なな**
高砂市立松陽中学校　**坂東　侑奈**
高砂市立松陽中学校　**梶本千紗姫**
兵庫県立伊丹高等学校　**石堂　幸希**
神戸市立上野中学校　**中村　達弥**
神戸市立上野中学校　**馳川　ゆう**
神戸市立上野中学校　**中村　日香**
神戸市立星陵台中学校　**高林　奏輔**
姫路市立豊富小中学校　**小林　篤矢**
姫路市立豊富小中学校　**清瀬　葵**
南あわじ市立三原中学校　**太田咲倭子**
神戸市立六甲アイランド高等学校　**阿萬田珠羽**
兵庫県立篠山産業高等学校　**前田　有貴**
姫路女学院高等学校　**荒木　正義**
兵庫県立有馬高等学校定時制課程　**山本乃々栞**
姫路市立林田中学校　**髙山　侑愛**
須磨学園高等学校　**金森　佑月**
相生市立矢野川中学校　**松本　薫奈**
播磨町立播磨中学校　**川島　笙寛**
多可町立八千代中学校　**林　海晴**
神戸市立青陽須磨支援学校　**能瀬　光陽**
南あわじ市・洲本組合立広田中学校　**山口　隼杜**
南あわじ市・洲本組合立広田中学校　**松本　和奏**
南あわじ市・洲本組合立広田中学校　**桧原　俊亮**

結社(グループ)	会　場	内　容	問い合わせ先
海市短歌会	神戸市婦人会館(中央区)	第4日曜、午後1時	078(371)0239　中川　昭
神戸白珠の会	六甲道勤労市民センター	第2水曜、午後1時	078(881)1578　小谷　博泰
檀の会	神戸市勤労会館	2月、7月、11月、第2土曜、午後	078(991)3073　尾崎まゆみ
万華鏡	神戸市勤労会館	第4月曜、午後1時半	078(242)1493　黒崎由起子
潮音神戸歌会	神戸市勤労会館	第1土曜、午後1時	078(431)8665　三津野幸代
ポトナム短歌会(須磨歌会)	兵庫勤労市民センター(兵庫駅前)	第4日曜、午後1時半	079(557)0679　中西　健治

令和元年度　兵庫短歌賞応募作品評

はじめに

安藤　直彦

令和元年度の応募総数は四十五編、三十代から百一歳まで、各世代に渡って闊達な意欲的な作品のご応募をいただいた。「兵庫短歌賞」（新人賞）「奨励賞」受賞者作品については六月の「会報」に掲載済み、ここでは惜しくも賞に漏れた作品を紹介し、選考委員の各評を参考にされ、次回に期して頂きたく願う次第。よき作品は生を強むるという、お互いにそうした作品を共有し合いながらさらに存在意義大きい超結社の兵庫県歌人クラブでありたく思う。

言葉をいじめて自分を追い込め

中川　昭

「ときを紡ぐ」

・人の世の音はるかなり山眠り　胸を衝く風百舌の高鳴き

・静と寂いずれかまさる夜の更けの気管支炎の音を生みつつ

人の世の音を沈めて眠る冬の枯山。聞こえくるのは風のように不意を付く胸痛と百舌の高鳴きに似た咳込みの音だ。この喩は苦しく重い。二首目の歌を読めば作者の症状もしれようか。悲しみを抑えつつも、逸ることばを口に濾過して詠えば評価また大ならんか。

「鬼の末裔」　小林　まや

・信心のようなものだと思いつつ毎日歩いて鴨を見に行く

・夕明り胸に溜めつつ絵葉書の余白に短いお悔みを書く

「信心」のようなものという発想の根底にあるのは、とどのつまり、人間と異類の生態の不思議さである。構えず柔らかく表現したところに作者の才を見た。「雲雀の声の詰まる空」も良い歌だが、全体的に言葉の追い込み不足が難。タイトルの「鬼の末裔」も少し気負いすぎだろうか。

「万事塞翁が馬」　石原　智秋

・歩み来しわが道思ひ返しつつジグザグ模様のセーターを着る

・霜柱踏む音に似るさくさくと同じリズムにおくもじを食ぶ

一連黄金の二十首。余るなく足らざるなく女の一生を詠い上げたこの静謐な抒情は作者独自のものである。「ジグザグ模様」は半生の行路の暗示であろうし「さくさく」は茶漬を啜る擬音に通ずる。霜柱の立つ寒い冬を迎えて、家事や農事にいそしむ女性たちは、こうして慌ただしく食をとっているのだろうか。

「駅のある街」　佐竹　京子

・目的地のある人たちには通過点駅に集まり駅から散らばる

・古い寺と神社を残し変わる街時の流れの中州のように

駅から始まる日常を通して、人の動きや街の動きを人間愛で捉えた意欲作。沈潜とした心情に人格が見える。寺と神社が「中州」のように取り残されるという表現は出色。都市は日々流動し人も入れ代わる。それが人の世だと歌っている。惜しむらくは「人生演じる役者」「価値観いろいろ」のやや直截過ぎる表現。

「不惑の原へ」　清水　昭男

・予定記す黒き手帳の備考欄ボンヤリ霞む令和三年

・鄙に建つ間なし地蔵の涎掛け真紅に替えて祈りし老婆

来年の手帖の備考欄に何が書き込まれるかまだ定かではないが、予兆のような「ものがあってボンヤリと霞んでいる。多忙の作者の一年が偲ばれる歌。「ボンヤリ」は平仮名がよい。「間なし地蔵」の意味が不明だが老婆への思いは深い。仮名遣いの誤りが見られたのは残念。

言葉の選び方と繋ぎ方

尾崎　まゆみ

「持て余す夢」　南都　勝

・粗削り（あらけず）段々さまになってきた荒れ狂う熊も鮭（しゃけ）を銜（くわ）えた

・ずれていた正三角の直角がご機嫌斜め痛いよオリオン

粗削りから、熊の木彫りに着地させる。発想の斬新さと、言葉の使い方に才気を感じる。「正三角」は星座だろう。冬の大三角には、オリオン座の肩の部分のペテルギウスが光る。遊び心を極めるのもよい。

「水ちやうだい」　立岩　康彦

・城に映ゆさくら愛でゐるひと人を横目で見ては妻のベッドへ

・もの言はぬ遺影にむかひ語りかくだあれも居ない仏前でぼそり

桜の季節、城と桜を愛でる人を見ながら病室へ向かう。つまり群衆の中で感じる孤独。遺影の前に独りで座り向かう孤独。「仏前でぼそり」は、人間の深淵にある寂寥感にまで到達している。

「視線を上げて」　渡辺　啓子

・繋がれてこんなに長い貨車が行く速度ゆるめず須磨駅を過ぐ

・退屈そうな電子秤にかけてみる十八金の喜平ネックレス

孫や母の歌もよいのだけれど、貨物列車の過ぎる様子、ネックレスの重さを量るなど、日常の何気ない情景を描写した歌が良い。さりげないけれど、言葉の選び方と繋ぎ方からその人の感性が、伝わる。

「ペットショップで君を待つ」　髙山　葉月

・「創造主に貴方もなれる」オレンジのポップ際立つコケリウム前

・傷ついても自分で治し蘇る苔を心に育てはじめる

ベタの登場から苔についての歌が続く前半は、生き生きとした描写のなかに批

評性もあって、題名の付け方もいい。「君」が誰なのかはっきりわからないところと、後半と前半のトーンが違い過ぎるのが惜しい。

「軽やかに、またしなやかに」　遠藤　和子

・笑み送れば笑み戻り来て笑み笑みの輪が広がってゆく〈ぞめき〉とともに

・吾もまた手のひらひらり泳がせて笑顔を向けて桟敷をすすむ

題名の付け方が良い。盆踊りの歌だけの構成に意欲が感じられる。踊りの輪が笑みの場となり重なる歌、手の動きのくっきり見える歌からは踊る楽しさが見える。周囲の様子が見える歌も欲しい。

歌は調べ、歌は抒情、そして適語を　桂　保子

「夢を探しに」　齊賀　万智

・答案につらいと一言書いた生徒を教師は未だ見つけてやれず

・やることがわからなくなりもやもやと進路調査の未定を囲む

現代の受験体制下の影や苦悩を冷静に抽出の一連と拝見したが、選考の際に最後まで迷ったのが書き手が先生なのか、受験生本人かという点だった。掲出の二首についても切り込み方は賛成だが、作者像の基軸がぶれるのは落ち着かない。

「青きらら」　地頭所禎子

・寒風の吹くも楽しと新しいマフラーを巻き人を待ちおり

・恋人を待つごと蝶を待ちておりふじばかま庭に高く咲きそめ

恙ない日常から詩を上手く掬い取っている一連だった。「新しいマフラー」や「ふじばかま」が効いてるが、「楽し」でいいのか、わくわくの感覚を「恋人を待つごと」のありきたりの直喩でいいのか、適語を探すのも短歌創作の醍醐味か。

「枇榔島」　吉田友里子

・もう誰も住まぬ屋敷に若き日の母が居るなりアルバムに笑み

・訪うたびに受け身の人となる母が暮らす館の名は〈エスペラル〉

老いてゆく母をきちんと見つめ、感情語を出来るだけ避けて一連にまとめた力量は高く評価される。一首目の哀感、「受け身の人となる」の認識表現は上手い。けれど題は大切。一連を象徴する適切なフレーズかあったかと思うが如何？

「老い」　大西　弘子

・逢うも縁別れも縁と受けとめてめぐりくる世にまた出逢いたし

・山ほどに聞きたい言いたい事あるに癌病む君に言葉さがす

伴侶への思いを素直に紡ぐ一首目は美しく、共感の一連だったが、残念なのは一連の中に二首目のような結句六音が三首もあった事、漢字の間違い、「告げつ浸ろう」などの減点ポイントがあったのも事実。少しの配慮で歌は秀作に近づく。

「四季折々」　岩井　隆子

・金柑の小粒の花のこぼれ咲き散りつつ早も実の青きかな

・戸を少し開けて虫の音聞きながら恙なき日の続くを祈る

細やかな感覚が上手く作品に生かされている。ただ、初句から読み下してきて予定調和に終わるのが惜しい。読者は結句まで読んだ時にハッとさせられたりドキッと実はさせられたいのだということも頭に入れておけば歌に深みが生まれる。

鑑賞の余地のある歌を　藤岡　成子

「飛行機雲」　杉村　芳美

・午後九時に病室の灯りは消されたり時間の自由を失うところ

・高天を飛行機雲が裂いてゆく追ってゆけない病室の窓

難病を患っての一連。二首とも、上の句で景を、下の句で情を詠み、景と情を一体化させ感情を抑制しながら仕上げていて、そのぶん余計に悲しみが伝わる。題名もいい。原稿用紙は最初のマスから書くこと。

「智恵子のあぢさゐ」　岸本　瞳

・この風も地層の奥に眠りゐる恐竜化石の夢かもしれず

・ひらひらの額縁の中に密やかに額紫陽花はいのちを隠す

四首ずつを組みとし、鎖でつなぐような構成になっていて、練られた時間が作品に見え力作。二首とも感覚が独特で、普通の言い方とは違うプラスアルファがある。貴婦人などの常套語は避ける工夫がほしい。

「手作り」　吉田千代美

・コンポストに人の肌より温かな微生物おり湯気をたてつつ

・この冬はホカロンいらぬという母の温感センサーまだ確かなり

具体的なモノの提示により、歌に込めた思いが率直に伝わる。地に足が着いていて、オーソドックスな一連で安心して読めるが、詰め込み過ぎの感がある。もう少し絞り、抑揚法を用いるともっとよくなる。

「海辺の役所」　西村　徹

・放水がミストの如く戻り来る潮風騒ぐ消防大会

・応えるか譲らぬべきかの間にて迷いし三十余年今閉づ

二首目が一連の言いたいことの全てだろう。定年間近となり触発された事象を直截に詠んでいて、テーマ性があり意欲が感じとれるが、やや常識的な範囲内でまとめていて惜しい。腰の句の破調には気を配ること。

「もう一度」　岩田美代子

・シングルマザーの娘が今朝も出勤すテールランプに真冬の雨が

・独り居の気楽さあれどまだ若い娘は恋をしないのだろうか

ごまかしたり取り繕ったりせず、作者だけの顔が見える歌にしているところがいい。ただ、事柄を追って境涯だけを詠むのではなく、意識的に自然詠や社会詠をはさまれてはどうか。助詞の欠落が気になる。

思い出深い土地を描くには…

小林　幹也

「水」

・洪水の退きし岸辺に迷ひ寄る卒塔婆の戒名さだかに読めず　石飛　俊郎

・朝霧の徐徐に晴れゆく加古川の真水の青にトラス橋の赤

加古川を詠んだ一連である。地域の特徴がしっかりと描き込まれていて、また土地への愛着もうかがわせる。ただ視覚でとらえた歌ばかりが並んだのが惜しかった。音や匂いや味、肌寒さなどをも詠めば、もっと広がりが出たであろう。

「古川の河童」

・幼日に懸け通したるお守りは水天宮の瓢箪なりし　森田　繁

・筑後川に「へこどんばら」と呼びたるは子供心を引きて余さず

筑後川を詠んだ歌が四首。おそらく作者の故郷なのだろう。懐かしくも、記憶の内にとどめておきたい光景を詠んだ一連である。ただ郷愁のためか、説明が過ぎ、そのぶん詩情が損なわれてしまっている歌があったのが惜しまれる。

「御崎の歌」

・丹後なる加悦の廃線越へ来れば伊根の舟屋ののたりのたり　上村　武男

・さみしきは冬の海こそ見つめけれ御崎の波濤身を揺するまで

自然の厳しさに触れた際の感慨がたんたんと描き込まれ、能登の海をしっかりと、また格調高く詠み込んでいるところに心打たれた。ただ旧仮名の間違いがあったのが気になった。「越へ」ではなく、旧仮名でも「越え」である。

「顔」

・師走とう言葉におされ庭掃けば揶揄するように雨の降る出す　木下加代子

・枯葉散る庭を灯せるツワブキが疲れたる吾の顔をのぞけり

季節感がしっかり出ており、擬人法や比喩が的確だと思った。短歌をうたい慣れているのだろう、なだらかな表現で、安心して読み進めることができた。ただ惜しいのは、こまかなミス。例えば一首目の結句は「降り出す」だろう。

「花いちもんめ」

・病室に将棋講座を流しつつ眠れる父の振り飛車強き　吉永　明代

・残る日を消化しきれず一段と高く鳴きたる六日目の蝉

老いた父の死を詠んだ挽歌である。「振り飛車」というのは、将棋においてピンチのときの大胆な一手だと聞く。病床の父の姿とうまく響き合わせている。次の歌でもうまく蝉に託し詠んでいる。ただ題名、もう少し工夫が欲しかった。

生動している歌のよさ

安藤　直彦

「老いの道程」

・歩けない理由はほどけた靴のひも老人介護の夢のリアルに　福山　裕恵

・天空をせばめ群れたつビルの街青信号を信じて渡る

自己の老いを日々に関わるコトやモノをとおし、確かめながら昇華させていく詠風が力強い。この暗示性に満ちた一首目、意味でなく、具体からの象徴性が心地よい。さらなる具体と抽象の作風の昇華をみさせてほしい。

「観光案内人」

・三の丸広場に立ちて火焔吐くカノ有名な「観光案内人」　飯田　進

・美人とは哀しいものということを教えてくれる古井戸がある

口語表現の軽みの歌体の中に、「コト・モノ」の真をついた一連は何とも楽しい。歌の素材がそれぞれに背景をもっていることも歌の幅を広げている。タイトルとなっている右歌の「カノ有名な『観光案内人』」の表現仕様が惜しまれる。

「片手袋」

・夕暮の駅へと急ぐ路のべに黒の手袋片手落ちぬたり　西村　節子

・とぼりとぼりと動かぬ足に訪ひくれば水脈二つ引き鴛鴦の寄る

老いふかむ身を問いつつの、闊達な生の在り様にあふれたなかなかの詠風がこのましい。「老い」をどうあるか、「老い」をマイナーとせず、生の深まりと、確かさをもたらすものとして、さらに遂げていってほしい。

「珍客」

・白菜の植へ場つくると振る鍬の先に乗りたる殿様蛙　藤本　太子

・玉虫は光彩あざけしままに果て木槿の白き花弁に囲はる

全体、身辺の生き物を生き生きと動きをもって詠いあげ面白い。「動き」のある歌は新味をもたらす。残念なのは、「帰へり」「あほ蛙」「植へ場」などの表記上のミスがみられることが惜しまれた。

「旅情」

・夕映のあやなす雲の棚引きて遥かな園にわれを導く　臼井てる子

・日が照れば薄着となりて春を待つ恋しき人を慕ふごとくに

伝統短歌の格調をしのばせ、どこか新味のある作風。惜しむらくは、「新仮名」と指示しながらの仮名遣いの誤りや「（餌を）あさむ」「光のぞかな」といった誤用があること。また、タイトルの付け方に留意、次回を期待したい。

広がりのある構成

岩尾　淳子

「聖夜」

・味方ないエレミヤのことはなす日はせつなくならむ冬の教会　宮崎　浩

旧約聖書に登場するエレミヤに寄せる思いを飾らない言葉で美しく詠んでいる。自らの信仰を拠り所にした誠実な歌には読者の心を引きつける力がある。

・キリストと岡井隆にあこがれて死んでゆくかな　辞世の歌で

連作全体の主題がくっきりとした信仰の世界を立ち上げていて印象的。ただ、

題材の扱い方がやや乱暴で、対象への認識の掘り下げ方が甘く見える。

「煌めくシリウス」　遠藤　瑛子

・友の名を消しかねている電話帳　海の底から着信音が

早くに失くした友を哀悼する思いが、無理をせずに丁寧に読まれていて好感が持てた。やや、表現に類型的なところが目に付いてしまうのが惜しい。

・今宵また探しに行こう大宇宙南南東に煌くシリウス

視線が宇宙に向けられたスケールの大きな歌で、世界の広がりがある。ただ、連作として、亡くした友とのつながりが見えにくくなって、まとまりに欠けた。

「人生をプロデュースする」　上月　昭弘

・貧困に喘ぐロヒンギャの民を救う今こそ世界が試されている

連作中にはさまざまな社会的な出来事に関心を向けた歌があり、印象的だった。批評精神をもって歌を作る態度は、視野が広くて評価されるべきと思う。

・古里の山に自生のうるしの木紅葉して秋をプロデュースする

秋の山の美しさを具体的な「うるしの木」に焦点を当てていて巧み。ただ、下の句の表現はやや安易に流れてしまった。全体の構成にもまとまりに欠けた。

「くだりの景色」　森嶋　郁子

・「おーいおーい」駆けつけたれば血の顔の夫が板の間にうつ伏せてをり

一連、夫の事故の場面から入院まで緊迫感をもって歌が詠まれている。表現にも無駄がなく読者をひきつける具体性に富んでおり、流れも良く出来ている。

・小難にすみしふたりのこれからは愉しみゆかなくだりの景色

連作全体として、後半部にやや緊張感が緩んでしまったきらいがある。特に最後の歌については、小さくまとめすぎて広がりに欠けてしまった。

作歌動機の切実さ　藤本　朋世

「わかれ」　中山　敬子

・錠剤の色とりどりは呑まれゆき病める器に沁みてゆくらむ

・くるくるとコンビーフ缶一巻し夫の残しきを夕餉にひとり

長年連れ添った夫君との今生の別れ、その前後の日々を綴った連作。一首目は色とりどりの錠剤に着目する眼差しが切ない。二首目のさりげない所作の描写に喪のこころが翳る。抑制された語り口が胸を打つ。

「黒髪のエルサ」　大江　美典

・ぽっかりとあいた空席二学期は氷の城から出られぬままに

・金色の髪のエルサになる日まで君に降るのはやさしい光

映画「アナと雪の女王」の登場人物エルサのキャラクターをだぶらせて、「黒髪のエルサ」として女生徒を描いた。明日を生き抜く少女自らの魔法の力を信じ、薄幸の少女を見守る教師の愛情が刻印されている。

「ワンチーム」　藤原　暁美

・それぞれに仕事を持ちつつ集ふ日は指揮棒一つに心つながる

・ワンチームになれぬ各国首脳らに地球の叫びまだ届かぬや

一致団結して事に当たる心構えの旗印として「ワンチーム」が様々な分野で喧伝されている。その具体例を掲げた連作。「ワンチーム」を束ねる確たる〝絆〟をどこに求めるべきなのか、考えさせられた。

「新響伊丹サロン」　老月　良一

・ピックふたつ買いて開放弦をひく吾のギターが音を立てる

・爪切りを携帯したりちょっとでも伸ばすと鳴らないギターのコード

初めてマイギターの豊かな響きに接した感動は忘れられないもの。今ではストロークだけでなくアルペジオの伴奏でも弾き語りを楽しまれているのでは…。なお、右指は爪切りより紙やすりをお勧めしたい。

「老いゆく吾」　上田　福男

・賀状には「これで終り」とパソコンで添え書きもなく友は去りゆく

・誕生日メールの数も阪神(タイガース)も何も変らず過ぎ去りてゆく

老いを感じてしまう日常のエピソードを率直かつ軽妙に歌っている。一首目は友からの賀状辞退のぶっきらぼうな通告。二首目はなにも特別なこともなく過ぎる誕生日。作者の苦い諦観、同慶の至り。

2020年度第2回幹事会報告

10月16日13時から　神戸市勤労会館

☆ふれあいの祭典兵庫短歌祭実行委員会

(司会)芝本政宣

■選考委員会出席者

県　(公財)　兵庫県芸術文化協会業務執行理事　中井弘慈

兵庫県歌人クラブ役員・幹事23名

■兵庫短歌祭応募作品審査会

応募総数　一般の部　307首　審査進行・新屋修一

ジュニアの部　372首(24校)　審査進行・安藤直彦

※予め用意された選者の選考結果に基づき、それぞれの賞にふさわしいかどうかを一首ずつ検討、決定。受賞作品の詳細は本紙参照。

■兵庫短歌祭実施要領の検討・確認

〈日　　時〉　令和2年11月21日(土)　12:30～16:45

〈場　　所〉　兵庫県民会館けんみんホール

〈進行次第〉　主催者挨拶・表彰式・作品講評・催し(講演　島内景二氏)

〈準備・役割〉　会場設営・受付・渉外・講評・講演記録他

追悼

ありがとう！

野瀬昭二さん

野瀬昭二さんから会いたいとの伝言が入った日は、ウイルスの院内感染が発表された姫路市内の病院で年に一度の心臓検診受診の日だった。入院中の兄さんへの感染を怖れ躊躇しているところへ訃報が入って絶句。十月十七日午後八時心不全にて逝去。享年九十三歳。

野瀬兄、佐藤重美、小生と互いの自宅で持ち回りの宴会を開き語り合ったロストゼネレーションの仲間。

即詠の巧みな彼から歌で多くのメッセージを頂いた。

・ゑみたまふ眼あはせて給びくれしきみの叱咤の言の葉うれし

・いたはりの眼あはせて去にゆけり『秀歌百首』を枕に呉れて

あることで苦言を呈したときの歌と、読んでほしい新刊が出る度に届けたことへの返歌。

土佐のいごっそと肥後もっこすと、どちらも頑固だが不思議な因縁だった。

飛松實先生を偲ぶ会で同席した某総合誌の編集委員の方が「いい原稿をお書きになるが締切に間に合ったことがない」と耳打ちされたことがあった。完璧主義の人だった。

・立ち呑みを出で来て遅きバス停に立つときわびし小市民らは

・少年兵ゆゑ特攻をはづされし安堵を恥部のごとく秘め来つ

・反戦のシュプレヒコール対峙して並ぶ官服君らも若し

県歌人クラブ新人賞受賞作「一つの風景」（昭和四十五年）からの引用だが、佐藤重美は同盟系、野瀬兄は総評系。筆者は官権。三宮高架下の飲み屋でよく論じ合ったものだ。

あの懐しい日はもう還らない。寂しい孟冬である。

噫、野瀬夫人勧めの浅蜊のバター炒めで麦酒が飲みたい。ありがとう　野瀬さん

合掌

（兵庫県歌人クラブ顧問）　楠田立身

神戸短歌祭のご案内

◇入場無料◇

日　時　令和３年４月29日（祝）

場　所　未定

●兵庫短歌賞表彰式

●総会

寄付御礼

●明石大門短歌会（主宰野瀬昭二氏逝去のため閉会）

●矢野義信氏

新入会員の紹介

令和２年１月～６月

上田　福男（姫路市）
佐竹　京子（西宮市）
門脇　初美（姫路市）
石飛　俊郎（加古川市）
尾崎　雪子（洲本市）
北口　康雄（芦屋市）
谷原芙美子（西宮市）

第32回上田三四二記念「小野市短歌フォーラム」作品募集中！

選者　馬場 あき子・永田 和宏

作品　自作未発表作品で一人一首に限ります。

投稿料　1，000円（※小・中・高・大学生等学生は無料）

投稿方法　①または②
①所定の用紙に記入のうえ、1，000円の郵便小為替を作品に同封して郵送してください。（※投稿用紙ご入用の方はお電話等でご連絡ください）
②左記ホームページの投稿フォームで必要事項を入力のうえ、1，000円を指定口座へお振込みください。

作品集　全投稿者（※小・中・高校生の部は、学校ごと）に配付します。

「小野市短歌フォーラム」に参加された方は当日配付し、欠席された方には後日送付します。

締切日　令和3年1月12日（火）　当日消印有効

賞　［一般の部］一席～五席・入選15首・佳作30首
［小・中・高校生の部］最優秀3首・優秀30首・学校賞

投稿先　〒675－1380　兵庫県小野市中島町531
小野市教育委員会内　短歌フォーラム係
〈TEL〉0794－63－2445
〈FAX〉0794－63－1842

第13回小野市詩歌文学賞授賞式

第32回上田三四二記念「小野市短歌フォーラム」表彰式

日　時：令和3年6月5日（土）12時30分～

会　場：小野市うるおい交流館エクラ

主　催：小野市、小野市教育委員会、小野市文化連盟

e-mail：miyoji-award@city.ono.hyogo.jp
ホームページ：https://www.city.ono.hyogo.jp/p/1/8/43/9/14

地区通信

【阪神】 8月1日、芦屋水甕短歌会は「五月風」第40号記念特集号を発行。特集として「『五月風』の40年を辿る」「座談会・藤井幸子四歌集を読む」を掲載。（加藤直美）

【神戸】 ▼6月24日、文学圏平山進氏は読売文芸にて入選。▼8月8日、文学圏武内栄子氏は山桃忌奉賛35回短歌祭にて入選。山本圭子・上月昭弘・青田綾子・尾花栄子・中村正剛各氏は佳作。▼8月23日、海市短歌会は神戸婦人会館にて森嶋郁子歌集『白き花房』批評会開催。参加者中川昭・矢野一代・黒崎由起子各氏ら11名。▼8月5日、文学圏上月昭弘・橋本和佳子両氏はNHK学園第七回誌上短歌大会にて入賞。▼10月14日、文学圏松下孝裕氏は神戸新聞文芸にて入選（黒崎由起子）

【明石】 5月22日、明石市柿本神社にて「第164回柿本神社春季献詠祭」を開催。コロナウイルスの影響により、出詠者の参列はなく宮司他神職のみで行われた。選者楠田立身氏。兼題「魚」、競点題「光」。出詠者45名。▼6月27日、明石ペンクラブ令和2年度総会実施。作品発表誌「新明石大門」第4号発行。「明石ペンクラブ通信」第21号発行。▼8月22日、明石勤労会館にて明石大門短歌会主宰野瀬昭二氏は戦争体験について毎日新聞記者より一時間インタビューを受ける。その後明石大門短歌会第445回、最終回。▼9月18日、舞子ヴィラにて明石大門短歌会（指導者野瀬昭二）・KCC短歌教室（指導者中川昭）は竹村晴子歌集『歌と川柳』・森嶋郁子歌集『白き花房』出版祝賀会開催。司会伊藤敦子氏。中川昭氏ら8名出席▼9月26日、明石ペンクラブ例会にて「新明石大門」第4号掲載の短歌合評会を開催。▼10月17日、県歌人クラブ顧問・明石ペンクラブ顧問・「明石大門歌会」主宰の野瀬昭二氏ご逝去。享年九十三歳。（伊藤敦子）

【姫路】 10月25日、姫路市民会館にて姫路歌人クラブ短歌大会開催。講演安藤直彦氏。演題『短歌とはなにか、そのあるべき相を考える』。司会青田綾子氏。応募209首。姫路市長賞大谷明美氏、神戸新聞社賞松田辰子氏。作品評濱守・内海永子・小松カヅ子・飯田進各氏。参加者は神保原廣己・生田よしえ・新屋修一・西村久代各氏他50名。（飯田　進）

【東播】 7月8日、茅花短歌会は「茅花誌」第196号を発行。▼10月14日、「茅花誌」第197号を発行。▼10月24日、前田昭子氏は、稲美町制施行65周年記念式典において功労者表彰を受賞▼東加古川短歌会は、毎月第2金曜日13時より加古川総合文化センターにて短歌会を開催。連絡先、新屋修一。（新屋修一）

【中播】 5月21～22日、水甕姫路支社は水甕全国大会（ホテルアソシア豊橋）に9名参加予定であったが、コロナ禍のため大会中止。資料のみの参加。▼8月8日、福崎町文化協会・福崎短歌会は山桃忌奉賛第35回短歌祭開催。選歌と選評、楠田立身氏（象）。入賞者若林久子・武内栄子・石原智秋・清水昭雄・首藤幸子各氏他4名。出詠数302首。コロナ禍のため、表彰式は中止。（生田よしえ）

【北播】 6月13日、第12回小野市詩歌文学賞・第31回上田三四二記念小野市短歌フォーラムの受賞者が発表された。小野市詩歌文学賞受賞は大口玲子『ザベリオ』（短歌部門）。短歌フォーラムの応募数一般の部1146首。学生の部6196首。入選者一般の部最優秀一席坂和生子（たつの市）学生の部最優秀船橋花音（小野市立小野東小一年）他2名。選者馬場あき子、永田和宏、宇多喜代子各氏。なお授賞式は新型コロナ感染予防のため中止された。▼四月の源三位頼政公奉賛献詠短歌大会、9月の小野市文芸大会（短歌）はコロナ感染予防のため中止。（芝本政宣）

【西播】 8月22日、佐用短歌連盟に尽くされた菅原艶子氏ご逝去。▼9月30日、西播磨短歌祭部会。尼子勝義、内海永子、小松カヅ子、七条章子各氏参加。令和2年度西播磨短歌祭の選歌と歌会運営について協議。▼10月3日、赤穂市民文化祭短歌会開催。講師尼子勝義氏。出詠44首。▼10月24日、西播磨短歌祭開催。出詠は、一般155首、学生420首。選歌にあたった5名が歌評。▼11月2日、佐用町文化祭短歌大会開催。佐用町長賞新家イサ子氏〈カーテンの花柄の影ゆれている雨止む午後の縁側しずか〉。衣笠邦惠・竹田幸男・船引貴明・安藤直彦各氏他28名参加。他、町内の小中学生180余首の選歌、表彰。（尼子勝義・安藤直彦）

【但馬】 10月26日、但丹歌人会主催「秋の大歌会」誌上歌会として開催。▼11月14日、豊岡市但馬文教府にて「但馬文学のつどい」開催。（足立勝歳）

【淡路】 7月18日「第39回全淡短歌祭」開催（於洲本市立図書館）。投稿数一般の部79首、ジュニアの部26首。淡路文化協会長賞・淡路文化団体連絡協議協会長賞・淡路教育事務所長賞（ジュニアの部）・淡路歌人クラブ賞など入賞表彰。桂保子氏の講演と出詠歌の歌評。▼10月10～11日「第三回洲本市文化展」に新月短歌社、サラダ歌人クラブ、淡路島歌人クラブの三団体が作品出展。なかでも満百七歳を迎える現役の歌人、南部清美氏（新月短歌社所属、NHK全国短歌大会など入賞数多）の作品集（一千首以上）に来場者の注目と称賛が寄せられた。（島田英樹）

受贈歌集・歌書（兵庫県内分）

☆『赤き故郷』　池本俊六
2019年2月　青磁社
たなびける雲染めあげて年明けるこの故郷に幸多かれと

☆『白き花房』　森嶋郁子
2020年5月　北羊館
ちさき白花房となすアカシアをしみじみ見上ぐ父母の大連

☆『われは戦後の』　井上美地
2020年6月　不識書院
ガリ切りを教えられたる若き日よ学徒出陣より還りし君に

☆日英対訳歌集『新・更なる山脈』　谷原芙美子
2020年8月　ながらみ書房
真昼間の絶壁登る友とふたり言葉交さず不帰嶮（かえらずのけん）

☆『月のじかん』　山田恵子
2020年11月　飯塚書房
螺旋のように連なる記憶に月昇る去年は傍にいてくれたひと

【歌書】

『オブジェタンキスト　早野臺氣※私記』　藤本朋世
2020年7月　ヴァイン
「戦前戦後、一貫してアヴァンギャルドであり続けた臺氣の未曽有の世界を描く綿密な作業の書」

令和二年度　兵庫県歌人クラブ
「兵庫短歌賞」「新人賞」作品募集要項

資　格　兵庫県歌人クラブ会員及び県下在住・在勤・在学者・他関係者
作　品　未発表短歌20首
様　式　1．作品はA4判400字詰め原稿用紙2枚に浄書、右肩を綴じる。
2．1枚目の欄外に作品表題と新旧仮名遣い別を記入する。
3．作品表題・氏名・生年月日・郵便番号・住所・電話番号・所属結社名を記入した表紙をつける。
4．封筒の表に「兵庫短歌賞応募作品」と朱書きする。
応募料　2,000円（作品に同封、切手不可）
締　切　令和3年2月15日（消印有効）
宛　先　〒676－0824　高砂市阿弥陀町南池526-22
鈴木裕子方
兵庫県歌人クラブ「兵庫短歌賞」係
選　考　兵庫県歌人クラブ兵庫短歌賞選考委員会
（選考委員）8名
発　表　令和3年神戸短歌祭において・会報第205号紙上
表　彰　令和3年4月29日　兵庫県歌人クラブ総会・神戸短歌祭会場
於県民会館11Fパルテホール

※「兵庫短歌賞」は、その中に「兵庫短歌賞・新人賞・奨励賞」を設け、年度応募作品を選考委員会にて公正、慎重に審査、決定（「該当作無し」の場合もある）しております。「兵庫短歌賞」に向け、既に「新人賞・奨励賞」受賞の方も奮ってのご応募をお待ちしています。

（問合せ先）679－5322　佐用郡佐用町上石井685　安藤直彦
℡ 0790（85）0021　090－3650－2998

受贈歌誌・歌書・会報
令和元年十一月～令和二年十月

「白珠」月刊　編集発行　安田純生
「白圭」隔月刊　編集発行　内海永子
「とべら」月刊　代表　尼子勝義
「山の辺」月刊　発行　高　蘭子
編集　植田珠實
「コスモス姫路」　コスモス姫路支部
「茅花」季刊　編集発行　前田昭子
「象」季刊　編集発行　楠田立身
「海市」季刊　編集発行　中川　昭
「波濤神戸」　編集　保田ひで
「文学圏」月刊　発行　浮田伸子
「六甲」月刊　代表　田岡弘子
「津布良」季刊　代表　兎田孝子
「旅笛」季刊　編集発行　角倉羊子
「但丹歌人」隔月刊　代表　尾形　貢
編集発行　中島眞喜子
「ひめぢ水甕」隔月刊　発行　小畑庸子
編集　生田よしえ
「丹生」隔月刊　代表　兼貞靖行
編集　山中洋子
「五月風」40　芦屋水甕短歌会
代表　加藤直美
「鳶が城便り」月刊　足立勝歳
「詩と連句　おたくさ」
おたくさの会　鈴木　漠
「夢」隔月刊　編集代表　山根晴正
「好日」6月号　好日編集委員会
小西久二郎
「石川県歌人」第42号石川県歌人協会
編集・発行　永井正子・陶山弘一
「夏季俳句大会特集号」
兵庫県俳句協会
「第14回全日本学生・ジュニア短歌大会第41回全日本短歌大会入賞作品集」
日本歌人クラブ
「印南野文華」78号
印南野半どんの会　坂井永利
「年刊歌集　給水塔」四十五輯
発行　東浦短歌会　片山田佳子
「合同歌集　どるふいん」下
どるふいん短歌同好会
「大分県歌人クラブ」会報128号
編集発行　伊勢方信
「大阪歌人クラブ」会報
発行・編集　上田明・田土成彦
「短歌　堺」会報　会長　小西美根子
「西宮歌人協会」会報　会長　井上美地
「京都歌人協会」会報　田中成彦
「姫路歌人クラブ」会報　発行　濱　守
「埼玉歌人」会報　第101号
編集発行　御供平佶
「和歌山県歌人クラブ」会報
代表　水本　光
「長野県歌人連盟会報」
長野県歌人連盟
長野県歌人連盟『合同歌集』
松田康美
『夢』55周年記念合同歌集　夢短歌会
「日本短歌協会」会報8
発行・編集　鈴木諄三・梓志乃

◇余滴◇

少しずつ収束へとの希望も空しく、コロナは居座っているようです。その中で、めげずに短歌を詠んでいらっしゃる皆様の様子に励まされています。来年は平穏な年になりますように。

藤本朋世・山田文・森嶋郁子